





貞皇式海印録五

曲原訓述

□塙字同川歎不極



〔塙〕冷麻の打枝と縁おの麻子のとさしとを吳
 伴のほおらひて物事いふ名を死とを也し
 吉とあり候字を塙東におわれと今ほ極とありて
 考るゝ候字も本義も塙とありたは其
 大衆とありて名候名の共なり及まあると
 かかき カツホくは声ニテ号タリ貞皇ハ候字
 やふ入 ヤリトヤト入ノ能ト 吾又塙ハ候字
 さをとめ 極が女と 子ハ候字乙ハカ十連
 たかえり 桐機之昔衣を女ノ通称セタハ美川
 いふおを考 否沿之ニ神也合玉フは白指貞ハ候
 きのくそ 莫告也と 神は塙ハ美
 表のくめ 藤芳ホト明白ムはく之来也ハ美
 志をり 志ハ助字 枝ハ候字之



野毛約 踏踏草 月八夜等七八月夜等不苦
 ついさつさつさつ 月夜等 相暗日八美
 以并舞き舞伴おも 成不嫌おありたよ
 あつる何を推ぐる通せよ

山夕 時折 皮 注 対 所 形 夏仙
 夫方わくせしおしひの書 粟儿
 我まおと八る春と流るて 赤羽
 後家のおちえん我を折さる 衣冠
 福山の麓に追付ひたりあ 蒼衣
 舞衣をさるの障敷すく 支考
 つきもあんなくて枝き程たあ 乙揮
 多きおと起て障敷の目もきれ 加枝
 障のむくう多孤届る 十丈
 よの中乃階きも考まきり 牧童
 布き後ま世む形く 柳七
 去て来る今夜の夏の日も 素行
 月を抱る 吉のお合 一介
 形くは千代の始や葉のむ 昨夕

辛 菊 有 中 梅 星月 金鈴 口 牛 年
 中くむううはほも三献 伯急
 月と中夜波の風吹て 甚二
 一お助の雨まきうつくきさか 口カ
 持てつりくとも西き書先 占ホ
 ぞうとら男波の余程るあて 乙砂
 ちと牛とら中うよんやト 柳替
 極るる五町五及乃田極版 柳史
 中人乃口半かうもろそ 伯楓
 本徳の目と尻目よ面の内 泉石
 一房のあわの石やうま 松田
 将老の役目よまうそをまき 而后
 口ぬきき方く 結納 山夕
 閑れとまの意はくもきや 仙芝
 材布を捨るむの山口 青原
 手成思の持よ流る版時 并六
 孫秋は仲費さく風吹て
 ひのせうたぬ毛えの連代尻

おひ

辛

夕

木

晒、おひ、ま、う、た、き、た、
 徒り、も、ぬ、く、む、ね、い、き、し、
 掃、手、原、を、又、子、小、展、風、
 独、一、て、も、約、を、一、言、原、也、
 等、の、ま、を、す、り、落、の、う、粘、
 桶、は、出、て、初、原、や、の、む、の、時、
 同字おひ、不、嫌、

又云、おひ、の、お、け、は、ま、き、う、と、う、お、ひ、は、ま、き、
 又、お、ひ、と、い、て、執、事、の、字、形、を、い、は、す、
 又、お、ひ、の、お、け、は、ま、き、う、と、う、お、ひ、は、ま、き、
 又、お、ひ、と、い、て、執、事、の、字、形、を、い、は、す、

又、お、ひ、の、お、け、は、ま、き、う、と、う、お、ひ、は、ま、き、
 又、お、ひ、と、い、て、執、事、の、字、形、を、い、は、す、
 又、お、ひ、の、お、け、は、ま、き、う、と、う、お、ひ、は、ま、き、
 又、お、ひ、と、い、て、執、事、の、字、形、を、い、は、す、

おひ

木

おひ

丁、も、大、き、う、屈、也、く、又、
 眉、作、の、原、似、う、水、淺、
 大、原、の、御、原、ア、ウ、キ、
 秋、丸、の、原、似、う、水、淺、

おひ

おひ

おひ

おひ

おひ

おひ

おひ

おひ

おひ

おひ

おひ

おひ

後の、お、ひ、の、後、お、す、一、り、
 大、毒、の、及、成、身、を、花、乃、重、
 大、工、う、よ、ま、ま、お、ひ、手、
 お、侍、う、ま、ま、お、ひ、の、
 お、ね、り、り、も、大、体、の、
 約、束、の、小、巻、一、捲、き、
 十、り、も、う、り、の、よ、ま、
 母、の、ま、ま、お、ひ、の、
 又、持、お、き、油、の、
 松、の、の、ま、ま、お、ひ、の、
 馬、拾、子、の、ま、ま、
 お、ひ、の、ま、ま、お、ひ、の、
 陸、君、の、ま、ま、お、ひ、の、
 柳、小、木、も、お、ひ、の、
 柳、の、木、も、お、ひ、の、
 あ、ま、ま、お、ひ、の、
 柳、木、も、お、ひ、の、

拾 ちんちん 大打出守のさきえ
 籾子も田舎とあれは後々
 藤子の橋のそらちり川
 水打と夜村のよくさや
 木馬の作とさるる解山
 月水の時言隠も又さきて
 手札をお所の十人よ初
 忍ねー 冴れ元も厚々
 坊つけぬれち刀と太田野
 お博くさくらと元秋の風
 人の噂と其の才乃上
 乃い先控令と元茶と入む
 全屏よお所のよ便と珍り
 風よ孤燭のきんさる
 早い出ていされと其のちり
 七々よ名のさるる服の葉
 ちんちんちんちん 尺とね若角力
 以程

謝 信玄の天服園の人を 忌一
 □ 英作 三去
 高き春即候と其候のめきイ作の敷と定守始
 ▲ 定守の坊イ作と号く又白きも或い初まおとあ
 是とイ作の悉三の字去之但三去の信白
 又高のぬわい巳上の信を奉おけとも同程之
 拾 ちんちん ちんちん ちんちん
 松 ちんちん ちんちん ちんちん
 依 ちんちん ちんちん ちんちん
 枕 ちんちん ちんちん ちんちん
 其 ちんちん ちんちん ちんちん
 皇 ちんちん ちんちん ちんちん
 柳 ちんちん ちんちん ちんちん

・我々不苦痛りるまき

索

る垂

何れやゝ泉声てやの

後水

不流の出流さるる腰をる

枕先

まゐりてあめり山は出る

枕後

折れりおあまをの及うり

信化

遠くの子よん目をむく

小枝

借急るるま加の性そ対目

林石

低

り足残

冷はて葉ふよしひ笠

白雲

三残ハ

くなくどて何ちもあさり

枝

オタニ

笑てすまん及ぶのれ

投壘

おあまきるるあまの晴さ

玄

加しや師女ははれて哀あり

神歌

白兒

ねたの侍り持人の月

嵐言

まのき新入のりあひり

キ角

田上持と麻いぬれて笑

小我

ん敬のお活白くははり

叔

古き良是よかち人備る

林河

月るるは頭博の急勢り

母去

ヤへ

りこ

に季を揺出は林あゝあゝ

示右

鶯の口押明て押さる

一林

来る人あゝと女あゝと

去

舟中分あまの屋居は住知

林

まろく一指を拵てあゝ

嵐作

ひろそとおまの月のまひ返

史和

櫛の丁乃先りあゝ

山店

小文

る足残

八朝の月代初はあゝ

竹

三残ハ

山つ居ちの角力あゝ

郊

林檎のあつて指あゝ

店

すくくを引起りる

竹

ちさんひくよの港持ま

支考

立居あゝあゝの泥散け

及止

目を照あゝと敷ま

及朱

程てあゝあゝをゆく坊主

固友

林の中乃あゝあゝ

乙白

秋百

く三

三残ハ

△^{罪後活}きくく一すひふちつむ^{下長}め

支考

きりもあられむ

松 夜を擗る月の小くつき 桐葉
 き 可もしい何を思の思のふ 菊
 一 すす目のはえぬ所のらつき 赤菴
 八 如きをめて秋なる人床一 又石
 三 さい病をきく入ねをつく
 日 時くるりにおまきの葉あー 示右
 一 了子わをきすれいそでむ 涼ト
 月 女房の只 森のそを宝 松紅
 一 冥あゝら死うくとしそすも 林前
 一 念仏上戸のわをも受ても 芭身
 一 白川とききよう白一 槿垣
 一 杖のりへささく被せとも ト
 一 △あゝあゝうたれれむらむ
 一 籠工のうの声いさあり 菊
 一 紫あて月まきき川柳 号那
 一 月の中をくえやう携ある 柳怪

松 乃ふも亦何系吐をよく是 行車
 竹 虎のきうさせけあり 泥士
 高 為志して枯きくそ昔れ 菊
 花 綱代の冠を市の食 珍香
 舟 舟の形ふよとてやうらう 斜嵐
 舟 初衣をきくふ男を言れ 紫
 舟 釋ゆつ船つ舟を運るも 菊
 舟 け丁舟の隈あつれ 紫
 舟 燈臺の燈をひく泳ぐれ 乙刃
 舟 肝のおを又喰さうも 赤白
 舟 馬士の旗を布して立ふれ 小枝
 舟 博下の田町やきうまむむ 月下
 舟 浪返と又申り 嵐宮
 舟 忽と首つふるく夜費む 相石
 舟 肌や筋乃おをきえむ 致意
 舟 孫はよ医者の匠を待てむ 糸人
 舟 茶いんあゝと笑はてはさう 杖傷

カイ印五

八

て留し留

為

梅垣よりいとこいゆるむ 枯木
川に却てき来りまたり けり
新葉所何よりも移るめ 枯

△て留し留 不極 カヨキ 古云

次句

花の木より梅よりけり 枯木

花のほ水より梅よりけり 枯木

着の力を何と松よりけり 枯木

後うち汗の帷子投て 枯木

各候留をいしく 枯木

又その林よりけり 枯木

梅意のちんさきあし 枯木

名もと地下と立命り 枯木

梅阪の別りも中の冷くて 枯木

新の葉落の中よりけり 枯木

その葉山子の弓を交り 枯木

唐のうす仙の石炭よりけり 枯木

月守も梅よりけり 枯木

風

久

去

白鳥

花いおきくうさうこれぬ 一葉

上よとくはと医表よりけり 白柳

便之の符は妻の袴忍て 枝文

笑てそり草さやの陸 虹棧

門先は傍む松のおめて 風文

てのい多用のあし 枝を許されと定也カ仁

七不出るる拾遺三方仙 昔自伝は集花

備表紙おたれ 初節 外伝

△は留し去 カヨキ 七友集

拾

長き杖を杖るまみのをけり 枝人

下んは生ま白の伝はり 如行

ちり雨の中よりけり 琴風

山ちんらるる花のおくよ 七右

草の唐や今乃あきよ 方生

唐よりあきけ替女のみやよ

あきよあきけ 枝も静よ 柳士

空言の字も尾むちりよ 只州

枕

流

長

カイ印五

九

△ありあ カはは 七下多持 ⊙

りよ 第木いあぬまをてあふし 箱

夜忍て旅するん 箱

箱 権のいあふ 裡通こ 口力

出急まの 利の権こ 占ホ

裸て居つてういまきりこ 昨古

あのおきりの面白きこ 漆ト

石の競こ 麻をおよこ 許云

立返ても 庄おそくこ ヤハ

在ふいわけのまふもろこ 柿向

寝も店へ出さとりよこ 漆水

車侍子よりもむえのんこ 穂之

念志そちの子を連こ 白路

唐桑屋のまふをりあふ 嵐青

お桑やの杉上風さきこ 依化

まよれい考てあだい太美こ 六之

系の吐も 久しうりこ

山夕

ソコ

ほ橋

音

白

申

箱

りよ

夜忍

箱

権の

出急

裸て

あのお

石の

立返

在ふ

寝も

車侍

念志

唐桑

お桑

まよ

系

山夕

ソコ

ほ橋

△ありあ。りあ。りあ。三去 カにに

ヤハ 月又る。頃博の之然り 示右

舟ま分あさ屋居し仕切り 一林

たもたも夜さきり 九柁

皆白化の換くり 右

蓋白きを奉おるこり ヤ水

鶏頂て大はの傍い入るり 目多

手道の石の幸ふあけり ソラ

むの息室の隣上居せり 口通

蒜くらし香をぬり 鼠浮

たあちとある板をぬり 一井

武士の双糸とあれり 揚水

人の猫の目とそむり キ角

他のまや人の甲乃凡る 小枝

伏見の月の昔めきり 牧童

三去の傍え常くもあふりあふの傍と

推えるよりメリメリも皆三去あふりあふ

●ちむすぬ

初白

△ちむすぬ三去 カユレ
初月や先西窓をさすむ 扇

一橋

おのろく屏の松を眺むむ 斜窓
車やのふきる姿を候むむ 信風

拾

木の白き桔梗や美草の露むむ 言水
や翹我度曲乃悟くむ 茶英

古拾

は島よと合てよとや捨つむ ソウ
にむりの程う高志くむ 扇

カユレハ
以外

川院の杭木や新の傳くむ 似美
浦島や橋石以て悔むむ

カユレハ
以外

麦飯の芥や室よ震むむ 扇
殺々々金鈴山や又つむ 去聲

拾

布と吹田のち作いふむ 夫
産出すと又苦地も思ふむ

拾

△ちむすぬ三去 カユレ
あまの牛七人こくくく 扇

今

今の乃よ我度去くく 一樹
抑哉の草乃世よさくく 夕我

昔

早田の仄に暮よまわく キ角
房了とれい雇風傷く 園友

夕

昔を懐く杖て出くく 一故
暮のおとあろくはく 栄友

冬栞

△ちむすぬ三去 カユレ
月々けよあれ屏の歌く 白聖
長句の何多うれとあ

三匹

△ちむすぬ三去 カユレ
さういそめくくは夜草も捨れ守 扇中
用心のつらふよ極そせ守 及朱

七き

かくる肘言ハ下も捨れ守 凍ト
紅の凍之 只もきれ守 之仲

夏衣

今も巻扱え物も晒す守 支考
金布ハも巻ハ忍く守

カイ印五

三

とそやうきさうりや

三笑

名よりの日のまもさす 松妖
傳子の光ね子ねれす 昨古

了

おとしの天竺の髪もなも守 之乃
をておく合おの事たりやま守

伝吉

戸初め隠いさとおさぬ 廿端
雪の上ある侍房 さぬ 書家

△とそやうきさうりや 〇

傳

葉小枝よ葉の十枝のんろと 去末
る部く河の床のまろくと 妙臺

百鳥

大輝う小輝よ喚く伯らうと 夕市
板舟の即く柏子よれくと 卓中

妻

ひくろきさるりも孫のつそ 次人
暖分の葉よをき白あそ

白鳥

世中の人乃目よひ連をぬそ 山嵐
ワつらけ口たきき止うそ 乃丸

交夜

松系の子遊子の面白や 意守
んむとあきく医王公美さや

や

草

面白の子女の杖乃扱すもや 弱
相織よゆをひる 梅や 桐葉

鳥仙

あふんとそあらの松からうら 南枝
久火時分うらてひけるう 念え

兼葉

月影もまろ海雲の扱の長さ 洞井
院ちさる湯のあさうの短さ 支考

一橋

葉う葉の葉を堀はり 傳風
乃ぬお井戸いけの短し

夕

子恨のり寸よおをさうと 和竹
角おちよをて来すくと 何屋

△秋きうしあき笛三ま 立志

橋

おとたぬ候もとりし 立志
扇室紙帳つらもむらうし 凡

去

去中く乃の笠もあうし 氷
きまの文よあういそり 雪文

信

人まろ物よ返りあし 先之
あふ中も似とあしあし 漣吹

カイ印五

三

○西美田もあー个一よを分比

士	尾上之廣の木奥をうみき 松布 佐てあふ子の敷のきこあき 桐敷	△もあーべー苗を去 カマニ	大粒まくれの赤椀もあ 素後	概乃あを松杉もあ 正位	山科は車引やむ勝もあ 痛右	拾うこ又のやう方もあ 高巴	行あふ敷よりるもあ 是通	ま寿とまろく上いひもあ 吉次	市は出ぬ日もえもあ 巴分	吸おあんとする際もあ 枕危	○ あぢまの符さうぬ祖父もあ 同麦	存よき一のいもせさく一 固水	あ月やあて出とあ 糸袂	△よをを分比苗を去	オモをあーの襟たぐを キ角	狭の弓は極きせし出よ 、
---	---	------------------	------------------	----------------	------------------	------------------	-----------------	-------------------	-----------------	------------------	-------------------------	-------------------	----------------	-----------	------------------	-----------------

新	家のうあゆるるを後せよ り下	松十	あをわいの後ともえよ キ角	三笑	親の形は上後の子さ 梅光	を	月娘の人のよまぬら自惚りよ りあ	を却	松ををされいとすむるを 尊二	ふ	えぬるをきてあせぬあを 伯念	水仙	うき涙ともよそくもほき イ松	比	念松そとつくユアハ山子 其者	松十	のう上は後代男のむの 免白	松十	△哉苗 ね去 多病者	松十	川をてかゝあし極うを 考占	松十	方おあしよ事れいもの名不 考占	松十	髪はあし乃 中下けうを りり	松十	うさこの細をつくくし 角	松十	花をせ枝つく梅の老木 二	松十	松りのうちをうめまふ 七る
---	-------------------	----	------------------	----	-----------------	---	---------------------	----	-------------------	---	-------------------	----	-------------------	---	-------------------	----	------------------	----	---------------	----	------------------	----	--------------------	----	-------------------	----	-----------------	----	-----------------	----	------------------

カイ印五

十三

一橋 去ゆく頼悪あり性ふ 湖頭

多し けしと浪はあさきくうか

氏義 桂去く文科丸の宮中外 千去

約よりくくもたふりか

十七 煮むより量ふ又女子外 高占

柔のまをふあ守操外 子

△はくぶらち。そあうう笛打去

古格 禪別衣 おもくそりし 翁

尿をくちりきも神子狭り 位徳

夕テ ちるる髪をぬはりし ソフ

あゆみのる合し洞をり 嵐を

十五 面白う梅し月ごうあう 紋糸

旅足の舞うたひをきかす 陸奴

あ 妻をえむしおわれぬアあし ソ手

畏る海し涙を奪しし ヤ水

三笑 陣よりあの手季を越てこそ 手原

ろ 寝い袴も 志こ こそ 古笑

浪 ッ子信もあきれぬ日和くりり 昨古

くろ 年の宵中のおよんくろり 梨之

△短句てめま笛カ仙ユ二万句ユ三

古式より下句の上句て笛も千句も只一と何の
なあるやけおの辞もあめぬえさくあれ
そ界よわさし人のあめぬえさく

△短句の上句てめ古式より一は一あれも花の
ま一はの百句よ三の作より初て一はあふ一二は
あふ二世定は花のふあさるく花のそ一は一

は一世のふあれ何席よりて洞も一く又花より
二つ作さるくおれおまかる句ニカ作せり又
長句のてめ裁を許すし何れは短句とそ

割すきやを奉る候の中伝奉位徳方凡
似女まいえ百洞より出て花を花より人
短句のてめ二も一とあうく先け人

後より法凡子よく老わく

● 終二由て留

化字

て

去

次句

一又反

一ニ

一原

一

は

思のきり子メあらゝゝて 伝き
まゝに去きも 是とて

思の美のゝとて 伝後

梧桐の夕一陽子を抱て 似去
八声乃月二空を揮て 去角

道世のよき子歌て 翁
一は秋 糸をねまて 方九

子西のむ人を空に流て 角
おの畠は 空をうて 夫

投引 掃ききそ始て 翁
たを付ねの吉世 去

くくりの天下 根て 去
あの方をくくのてくく 翁

有まきの月いれよきま 去
夏むふけもいそやけ世 去

さるるる 隣あり 一
は 傳よるよ 三句去とて也

新

あゝの 投乃 似石 振よ 角
あゝいとも 投の 仲も 新よ 仙化

大注 去日ニ 投
あゝいとも 投の 仲も 新よ 仙化
のよ 二ふある故よ 二たの 投を あゝ 新の あり
二たある あゝよ あり 一

去日 投の 字 溢 新の あり 一 投 百句 あり
る 七ア 投 心 深 二 弁 一 一 人 皆 古 規 を 新 一

△ 傳字 畠 カ 仙 二 十六 続

拾 其 之

新 伝 根 二 あ 一 一 板 の 底 桐 葉
二 百 連 一 一 三 の 為 札 一 一 傳

は 九 仙

た づ き ひ く 傳 小 声 の 男 同 士 三 翁
涙 二 傳 一 他 の 人 新 一 葉

は 九 仙

竹 枝 の 尖 き 月 の 夕 風 一 一 傳
去 来 の 実 ち き ち 牛 の 嘔 一 一 翁
き ち ち 一 一 音 美 ち ち 閑 一 一 葉
ち ち 人 の ち ち ち ち ち ち 病 老 一 一 傳
為 ち ち ち ち ち ち ち ち ち 紙 の 屠 一 一 翁

カイ印 五

五

夜のそよの合ぬひき
 夕ぐと輝る所の旅ん
 谷吉風をうつくま下
 むちうてまき足茂の角指
 こまの尻をさす肩衣
 出代の標に控くる持草履
 多の日あしころ風志
 △てまふカ子十五歳
 暁の新神と引控て
 片紙一をあつてはほそ
 吸わいふころ時いさそそ
 あのみきらむのせまちりく
 障梅うすれ目利の連りり
 子おぬく 佐木を考る
 免とも志をふ不た似て
 三世おともあそぬ慈す
 浮なき紅の神もまぐやら
 紫 菊 紫 菊 紫 菊 紫 菊
 小枝 八字 杖 子 枝 紫 枝 子 枝

朝をまおうおきてあ
 多きのゆきのうまきうく
 子供うす取るくゆく
 松の木の子ああるく町の名も
 死さともいふさともいふ
 己作の園と月とを扱分よ
 ナリ下結るゆい影け三係さ足て句扱
 仍名易の付い才之字届すは癖位を止よ

□お合辞

昔よりお合辞はテ揚ふい才之の届はるメの中
 坊ノの届ト六ノの中セノの届ト八ノの中表の内
 たり長う短へお合とて日辞と揚り扱の中
 より才之の届といふ扱と短より長へ揚り扱の中
 本式の儀紙に二行きは揚るたて日辞並て足後
 あしと表とけを降るる古今通式之祀已下ま
 後(守)扱するよの二行きの付ら表も併さるる扱あり

終さすして
杖の目お終
月よりお終の
まうるたて
お終とも尾す
終さすあられて
正字ちやとて
あめをさむる

先故

終さすして杖の目の終 一白泉
月よりお終のまうるたて 九化

終

△表にお合を許る所
お終とも尾すあられて 尾す
正字ちやとてあめて納る 尾す

終

陽冬のお終あつるたて
終さす方より月ひらむく 村終

終

木終まそもる人頬のたぐい 岳す
長押の陰より長さとえす 凡乙

終

△終さすして杖の目の終 一白泉
押終の終さすの口を喰うて 尾す

終

尾す尾す付て終す尾す 八
尾す尾す木終は人角折て 尾す

終

尾す尾す付て終す尾す 八
尾す尾す付て終す尾す 八

終

尾す尾す付て終す尾す 八
尾す尾す付て終す尾す 八

終

尾す尾す付て終す尾す 八
尾す尾す付て終す尾す 八

終

尾す尾す付て終す尾す 八
尾す尾す付て終す尾す 八

終

尾す尾す付て終す尾す 八
尾す尾す付て終す尾す 八

終

尾す尾す付て終す尾す 八
尾す尾す付て終す尾す 八

秋目 懐は揺揺きして又出る 胡及

下戸を閉め、言の釈乃亭 カ分

あの家いほう秋風を後くく 以之

了教あくる 門の竹垣 落戸

馬丸 燈おの香を暖とまきらる ソラ

肌あつく 羽衣のふ 川水

まど止め言の戸ぬく 若葉

さー秋くる 世翁のまき 夕葉

□同字付の不極

蒼ろよま言の意を又て付するなといふ

字も付白を嫌す但月花のおし限られ付

らま守更余の同字をよく付をま物とする

夕 一代は又とあるまんあんあや 井炊

足 大なるもまきくあや 栄友

植いっそれと身のおの花 正向

身 ちとまうふ言てん言まう 白鹿

みの 三月の竹あき 榎れ地 爰月

ま ちり持よとる 庭あうも 来臨

あ ちりしりまも 伝らる 呪 口力

と 節とてあま 院家の口くく り本

馬丸 瓜畑まよとま月をえて ソラ

夕 言を向ま 葉乃畑乃 川水

六のま言語の都ま何あれい定し思言す

□多用の辞続不限

知りの言を閉る草の戸 芳重

さく日よいなやまう言花の陰 りト

橋のやまのりもや 局を 仙化

秋の言秋の葉の子の吹く 朱弦

節と破て情をとる身 琴白

唇ちう紙とくうつる 朝 千り

乃く眉を隠すきぬく 菊

けい候て哀まえや 宿多れや 千風

以外でよをものともホの多用の辞は続限や

下は拳の続不極係の中もあり

△三行成五不極辞

△てよをえのとそる

△六三三ノ下

已上の字教は上中下

並三行成力は二一五

句は字をうけて二三ふ

何あり二並成いなきをよ同字もあふあり

△三腰のて腰のよとくするしこの低句は限て

さうの中なるま又各あり或いはれはきけんの

まきをも使はれり押字もはれ抱字もはれ

れて分るをささきとされと打成はけりあり

そりり同拍子も用寸早ぬはれて不のぬとそ

も成りて辞の指合はれ声は倍後ありきれ之約

△定まててよをえとむおぬれは成教並も

分るも極さるる下よひく支考及の何とそ

もゆと支考ありはれはれこの竹の自體ささ

引るも辞のむ字を濁よといふありはれ

ニツて笠する鳥タラれて 桐葉

かきし袖をいれぬ不記 叩指

何訓て月まらむの浦傳 業云

まともりの林の風音 自笑

捨るて裏より麻は年さき 如風

降るりうて暮を過ぎす 必我

月高よ寸切を名寸察伝 嵐音

園栗枯て花山終りり 神教

二三儀引抜きをのれりき 我

まよゆれてあはる盗人 キ角

大寺の川幅成る 向風 教

一本を焚て仕す私方 雲

稚の木は通し訓る角田川 教

ささぬぬあむ母をむえ文 估抄

河木よそよあといま寺は遠近 桑常

旗の袖くしたをささひく 葉考

おはる侍子をまし子の忌日 教

高

上

鬼

中

三行

皮

上

七行

五秋ハ
多ク

孤矣を拂くはる初ノ 牛角
 夕月ニ新むる味て禱る 八水
 かつくも打寸君を孫ぬき 所
 賢行いま分借一犬後 常
 何処て居るは山苗のさや 園友
 取及し合長をききてる信水 高
 又そのあるをいつく壺笠 水
 幸んまうむせ返るる菘布屋 所
 飯防の居るは先言の菴 史邦
 并南の菜を只おく石の上 才彦
 流しききよ味る極子 嵩業
 にはおのふとふ君を丸くわて 翁
 おく中よつてき足る 岱水
 月そそるるの隙やむ早の 邦
 ませの儀は木めく川豆 翁
 下をへるは同辞続くるあて
 印表をたやおけは打きて 彦彦

廿日
中よ

杵白
上を

拾
中を

和山雲
上を

焦
中を

香子之をけり栗橋の雲 翁
 松杉を挾持するちの門 ソラ
 ちりよををきり砂の坊
 界の信花の雲をもつるめ 口通
 上る小あやをきむ谷川 友五
 美き方の隠者と生る日詠 若翠
 表のちをを悔むこの子 通
 保えいあれと平信は只二老 伯老
 けおのそく強とかぬる 松守
 神のちをえりて世の風 秋函
 は山伏をきぬぬおあし 左明
 新宮のつるも月秋の白妙は 五角
 葉つてきい松の小島 山樞
 柱柳私るは月出 一在
 京の籠は柳らよある キ角
 誰うある帯のききしは守守 階
 には月中もて毎の葉合 大町

カイ印五

三

●のとまる

根中

上の

今更
上の足
今更

三尺の短し小あひらねの尻
ちや美子を情むは身
あひの教養と足やうす
お水園をたぬあうち
白雪の夜部 尻立の十中
又放りぬぬあひらね
流の道くさる美昏は
梅津桂の竹の子乃甲
二十の笑をあやうし格きりて
まは是をの犯考振し
忘めて月を流るおみ振し
郭の声の仁を流るる
ひらさささあやうし格きりて
風し一葉の男丁そあうれ
よめお振しと快の 桃
市のあひらね店先の格きり
さあ只今とあうし格きり

車花

中の

總白
のく

梅中
中と

お花梅とい何さ油の寺
舟をたたくと踏のちせく
西の地秩も極楽もある
き声は月が文ぬ浪花格
花か人もおの尻さぬ
芳くおれを流る子あて
いせに波もあうち守く
正月もあうちをうては字さ
孫よあうちさむ老の懐
人おも梅し花の旦那ち
きり合
出代も尻と寸の笑子
大工のいひききさうり
海神もあうちあひらね
拍むし又あうちさむ老の懐
矢倉は赤子を也すお坊主
花ちの赤と又ええるお坊主

三笑
中も

文月
よも

歌
下ろ

お花梅とい何さ油の寺
舟をたたくと踏のちせく
西の地秩も極楽もある
き声は月が文ぬ浪花格
花か人もおの尻さぬ
芳くおれを流る子あて
いせに波もあうち守く
正月もあうちをうては字さ
孫よあうちさむ老の懐
人おも梅し花の旦那ち
きり合
出代も尻と寸の笑子
大工のいひききさうり
海神もあうちあひらね
拍むし又あうちさむ老の懐
矢倉は赤子を也すお坊主
花ちの赤と又ええるお坊主

カイ印五

五

細き井備をよるる若あや 翁
去風よき鼓少中振芝右 嵐草

園の扱序。西楫の声 去来
流すうわつふ月のお人 桑柘

秋又実をるむくしの杖 乙抄
冥入よきまのワヤ田毒とて 史部

王をさあ。そのはに 玄哉
押割て大よれりあう候 示方

春加よ物。傍乃首途 翁
△お杖並不極辞 ○八重下

○履 寸 ずぬをにへとるてもまも
竹の子あす松乃乃乃、

○松白 寸 芳あふそまのふきむの山 涼茶
去風さす寸へ合の知布 陸子

○多 寸 板く序よおろ寸板の枝 百青
日は何り能中よとふ厂 山り
月よもふ去をて寸板の息 及由

未末 中ふ

夏新仕ゆき言との来風 翁
石さま寸杖よか不き来も 嵐草

花 下ホ

二毛人草えも果さすあ出て 朱
反打とくくく。め一扱 凡北

化 中お

けのぬの涙も又あす首曲まよ 翁
刻ももろぬ仏垢つく 萩子

枝

初花の垣よ古竹結ばし 一物
及もくくぬ月の新さ え代

如 中ホ

狐をつ了ぬおときく心 仙雅
云くを我又おりて替守 晏小

如 中ホ

大造をあれぬ化社の時 不柳
集て又くれいちまぬ心 白在

白多
中

海ろとすれいおありとや
よ中の程やう香てむの契
懐て多人の海子考く
出て眺れい橋の川一木
海子の相も山より香る月の
三つあふれいア方乳を
忌替れい海おききまお
真の庄おく給居るこ
花あれいむさき家も止れ
田面ふむれい海の相の守
お乳席て着うよおやまぬむ
只跡一いまの玉之
夕の日は霞ま張一人歩状
新もぬ守角入てより
花の草新まきい一夕生れ
かう在ふい一い一區留
七てあるひ人のむもまきうり

三
中

風
上

拾
中

夕
下

ヤ
中

牧童
支考
林角
考
芝船
弟
才跡
去芳
如風
自笑
童
乙抄
小枝
字中
考

高

抄

一
中

白
中

山
上

余程柳く乙色の束々
あさを胸てあくる文の束々
あくもくこのせまるおあ
何不とやうな仏くる中居友
門外に笠を被くる天新考
死れと人の状の念きむ
帷子もひきまある八九月
陸は折くる帆柱のお
十二年先の下と持ふせて
メ出される吉原の王
り取つて明てあさ
と食のふよ多もるりて
人は向てもさしける月
早もきまうさきおあめ家
依き早もかえるそのとき
山家も町とこのあれいこ
更程推て来るれい何れも多何と早考

波童
口通
足
園友
乙由
考
清凡
仙尾
凡
車室
初信
嵐書
又跡
巴分

去
ナカニ

寝いふ車 曲く舟カ
鶴頂て大徳の候入今夕
何やらきくむ我玉の声 残人

帛
イヤ

凡家の始や真の田植身
いちこそおて糸没 草
水せきてひわねの髪や雪む
ソラ

夕
トク

庚まろくや申をまろく
出字の思いすすめ内より
ねむ使や 宿中るま
往時

あ
トク

整えぬ舟や悟り仕ぬ
暮まろくおの哀や八代聖丸
キ角
をばや信し志あす子謝れ
キ角
去の舟よりほのあきり
昌若
ちすや子ま伯は信を細て
之乃

ア
トク

筑赤や九十九瓦の更一人
巴うちんをいもぬ汁立

合
カ

灯大や月も出くも男入
三とちの松のこきやゆくと
陵格
お月よう和候の又の去用干
里川

白
カ

林も人もや又くむ刀折
角
陰々徒士いろく袖笠
彫蒙
棧造否志る浦あれや
肅山

知
カ

待も只あれ老の祢名
角
秋の人えをやはれはは位
業
まろくの苗や布袋の夕涼
秀川

和
カ

揚をぬき六月の中
支考
秋考のやお山を度舟よ又て
捨石
杖風もくちや指す甲のさ
早を捲て言の月うけ
松むしや雪も冷もあつた
車
あつたは冷も雪も松むし

夏
カ

夏は白く疑のやあて才三口合のや
カイ印五

トテ

むらあるそよ夜てき之否 之白
雲をえをちくく際まろり 鬼費

去と林

いづ指はえい妻そめてこや 手
舞年の利発を町よ弘めむ 吟山

拾

手造の所の幸もけりりり ソラ
月も今昔し又むるの市 花

あつ

誰う使くむ碑の銘の考 雨相
云せを朽木のむと拵はて ラ

あつ

去の抱り母衣くるくむ 口通
初おわいーきき思を化結すむ 翁

あつ

夷の衣をぬしくそあく ラ
明く志めむ丁を懐いせをて 不玉

あつ

お友の忍布一何とあふむむ 出芳
木をこあふりの喜のうたれ 風麦

あつ

羨麗を又せむと人の辱て 翁
几角を張返さむと持弓 才人

あつ

約も向の明神乃否 乃否

あつ

夕言は牛房ひらむと眺れを 芭二
車風はる流球表新しく 支考

あつ

切遠くる小田のお言 呂九
歩まくるる脊ある木海の舟 不撤

あつ

雲探のうたの悩の思ーき キ角
後ふりりる合二方あ 残人
いとをきき子と他人と号り

あつ

帷子と風も清き中小性 り車
ぬくは返さずを黄昏の文 角
英きき声の自を破て見る 兀峰
さしきき時内て小神を 智欠
あつのは出匠と一茶ちの 呂竹
いよの便のひいとあき 百花
るり灯の月をくせとくく 指風
傍の懸るるをの夕くれ 之室
甘言花婿くくと踏返して 翁
一度ある事二返もあるこ 考

カイ印五

六七

白夕

深

寄

了

去麻

極

去いむ杖いお屋とかをれも 後音

あうぬおまのまふくりに 小枝

まわてれおれあうまう 酒壺

まてめてあうたの大日 扇

まてお目もくく人の声 皆水

まてあうく内さうりて 指き

まてい似合て髪の長さ 大川

まての白乃時を竹 子結

まてけりくちの 涼ト

まてるに開いまのまより 竹花

まてけりまわわわ 咳

まて一ま尻う一人来とあ 嘯風

まておて又せうとま小摺 踏小

まてあうおけ降くい言 玉指

まてまきくおやま守陽信母 千栴

まての嵐を中腰は 文

まてのこれ影目とやらを哀く 千那

百鬼

夢

柳

夕

夕

独抱をニワく 市中

すんふく月の出るとむを 游風

まてあうく采の焚屋 新橋

まておす時りまう月を 万友

まておしき杖の帷子 李吉

まてくく多又茹を折明て 天童

まて大のあとういおたをま 妙航

まてんいむまやまうくま 六之

まてくく喉次はすの聲のむ 甚二

まてあうく杖を足知 り鳥

まてんていお寺事の髪 松川

まてあうく使と又とり遠 り取

まておまふりく月の本をう 白鹿

まて秋の麻を足れを吹 嵐

まて蚕蜘蛛くくやめてをれ 巻母

まて指衣留ユ屋ををちおい 百笠

まてのりまの許す木匠の山万 ヤ水

背をえて中を候ちうり 三拍
うちを候むきをぬれは字ち 一故
今の山風う今う 二飛 井炊
忽ち京にあらうとち候い 原ト

□体云用云云

△^日用 凡 態 勢 の 字 数 より 急 押 後 用 の 勢 字
初は後令古武一二といふも初を替てはと
定むへく其外の初字の面をさへ八と定むへく
七るといふ句といふの字去いたし及も守
傍ておさへ面をさへ二るといふは守へき
△^日用 二 理 五 通 の 傍 へ お 去 け 面 去 五 去
三去ホの勢字を分あすく初三去のおも
面を隔る二去も守せよとそれて体用の
字数を初あつ定むれば多候し候へき

△三去用云云

振は出てぬれや待る守申 支考

白タラ

キ三

あ

加ケリ

、 麦

女帝

規

ひさ

行

早月

お木さす傍は流子と登し 辰吉
使はすくうけて下され 小枝
孫弓控て去も旅を 整舟
たうきうるれいひりうと 右大
手うく淋の先をよやり 李王
麦の葉を連し隠せし味をて 麦春
目もあてくろく看板の伊達 已災
芳るる權ころををつまき控 守席
るる合の雪宿束る筑前川 下
芽も立ちあて大割の材 水花
むす末て年も色を添すく 嵐高
新からむ又と出来トひかきそ 力号
何ともせぬ工落る約柄 故人
思ふおのそうくかて突あす 号
為忌工出うけつすまお 由戸
月文のかる新地のワラ庇 記之
草より表と出寸 糸 東郷

夏

たすまひに加さしむ
沙々く江戸の島子に朽ん
自菜さんて奈香友連
林傍

小弓

月夜に川を渡る
雪のあふ板に花は
糸のきれなる中吹れや
道傍

夏

あつたまにふきまひや
花よりあふ人かよふより
蕉堂

夏

船の洞夜をえんけり
一髪

立圃

毒心な中ら市の目くら
吹矢角控て北風の奈た
連支

冬

乃終る成ておらる其ま
わさめくのささし七十
ト玉

又

車かめすいさよま令おほひ
重み
□二去用云

末

又居付取付有る毎成出入

又

又又分て 匹守 奈芭 酒
名号をよるえきとて 樽肴 酒

り

ひちりきききけむえのためきて
二及通てえききいり 成 源ト

り

又すすく依後いねる一日和
とさるんこれい愛い是りり

冬

芝居又よむ月のお書生
又初く猫の極りす年 菜志

井

信ておる船を寄る月のけ
舟のちん奈よ水いあふり 伯桐

冬

早くてあつた空のうち
雪屋よあるとに附も志あふ 栗ル

冬

雪ふいおし猫もきぬく
鍋状おけ行てをらら子 車

冬

いやそやとやろくよさすれ
誰う来とやう戸らめてさる 素村

菟丸 切しやる茶漬の何ぞしてをるそ 冠
 状を之後何の形拂交えて 沾ホ
 伊約をきく掛たの 而
 赤くむまを先列して 里ホ
 汚借てすくた付ぬ小高
 林大さくは采えくは庭のむ 出芳
 日ありくく二司れあふ 苔積
 手くあふるのんをえくして 乃高
 赤髪えく秋すくく 乙有
 了く西風を行くゆく 葛森
 吹付てるぬ付くる未申
 腰乃つ斤丁む山のふ化寮 山只
 折てあく去用之標の意付て 杜吾
 狭きくむ付くまありくを付て 之仲
 夏茶谷の花のさくくつ付て 貝家
 之巻もつ付ぬ浮世の楽をする 口通
 きめよきまきくは化粧する

雅 む月映りのいさひする家 方丸
 祈する夢の中を押し出
 言の布袋の爲化粧する 嵐号
 からつくするよ足装をうき 史邦
 する物の着るよすれワウ 権文
 出付てある冬冬の物古日 ヤハ
 あのみちのちぬユまあるあふ 三洞
 二枚ある遠の年まきき 松 楓子
 押さる子粒の宝あるきく 吉吹
 七つあるひくの花もはさうり 支考
 隠あふくくはてあるもあり 吉邑
 下板の増し賑をあふかうり 寛枝
 ひく人ふひくれくをさひくく 柳教
 海之くまきく画をまひくく 奈相
 酒屋の草布りりて月の影 三波
 丹波く使もあてあく鳥 三洞
 神のひくくくくくくくく

多 抄業を居る様のおおされて 五五
 花 花をさきさき欠格の富 正平
 三日 三月の余り澄みおやせむ 支考
 我 我旅の孤きさきのせきひて 考
 能 早おの早しきをき 茶 柳百
 白見 目よきぬつり者を引くて 牛角
 出代 出代さして杖をせりき 浪香
 白竹 田中の乃の通くれゆく 依く
 枝 枝の糸汚を通す接の者 風泉
 枝 欠る竹猫の子を出寸 年寂
 眉をさきして睡まうて 糸常
 古き古きおれ残り 采葉
 古き古きおれ残り 口園
 すくきの印をさす杖のこれ 牧童
 泣くる泉のつらめく付 北枝
 □二五竹云

ば 拍言小史中内お笑禮古日
 拾 ばあさり何さ考工位せむ 竹得
 ば 髪をさむる事のおきよ 若
 之 ばは母の乳乃乃止山 許六
 夕テ ば西行もあーやりこ
 ば ねる水は独活のあお桃て 吹山
 ば 人を隠すおまう 杖 翁
 ば 此の化お咄さうさうて 之乃
 ば ねつさおよりおの出入 若
 市街 ばお母むむ部屋の注文 不龍
 夕魚 妻おは病志の如の氣をけり
 言 言客をささるる魚も来さう 尚白
 言 言殿の博し登るれ一り事 若
 言 ばあさくもあさく小僧の言新 龍元
 桑葉 ばあさくもあさく小僧の言新 龍元
 小 ばあさくもあさく小僧の言新 龍元

コハ 小去の天部未だうたふ 列字
 小 小家のむ改彩く霞字茂
 ムウ 先振の南名きく快使 不殿
 先 古あらし先く分南と舟 不殿
 天 名ととふちい名あらく 夜袖
 申 あ風ちも去の名務と惜ち申 キ布
 者 去るきとさん中くむのさく 幸平
 キツ おる守のちちも治ぬおや り子
 内 振ととら内位の多るる り合
 山夕 おい伯又きつるとと油扱 杉尾
 お 治治のよめぬおと際く 衣籠
 表 後印のまうも笑てい花 キ角
 笑 是とも集う笑止子乃 控言
 軍月 古事附くと陸尾の湖 田突
 古 かく降のちくさきと古字 可也

□三去用云 カコユ云

連るは廣行行替 陽 陽 陽 陽 陽
 言啼喰吹咲 霞 霞 霞 霞 霞
 二去に去の術を尋るるもいふ

極山 言性をあつる小使の連 支考
 ツレ 及び子存のあつる連を 念子
 文星 後星の連を令切とふ 岐文
 、 むら後立てる連の未又守 松陰
 了 白き小僧のち急の走る 涼ト
 三匹 後急の衆の列しておの 仁行
 三匹 さあお親とくくくを色色 考
 翁 翁に水ふああれ快半を 水南
 翁 翁をあふかんけはつむ 乙抄
 三 ちつと一夜工橋と刈しむ 屋南
 三 ちよれんむせんくくの早 夏白
 三 風より先く柳ちりてむ 伯太
 ひき け村の度きと医志のさうり 力今
 度 解るる秋の夕へそだく度き

巳	齊	あ	キ	白	小	任	行	カ	三	文						
月もきこえてさうさいさうつれさう	世と門よまの女房の持もとも	袴の文のぬいぢや	孫まややお文おの孫持や	お角おけいおちる寸く	約納得して笑やくらむ	振あう持さけてゆく	此のちろねを籠うついで	糸の切る几中切れゆく	今さうして目えくさう	すんくく懸ちもゆく	祇をさうしてれまをゆく	元治の初も忘れ寸長振奏	りきりせきもむささう	振らるのまらくくむささう	池田伊舟の杖う出る	萱竹のさうかきぬえさう
白阿	音由	鳥月	右京	史邦	種文	之左	イ指	兼原	赤警	淡砂	函新	咋古	伯糸	楚舟	古大	守珍

カ	三	キ	白	三	キ	白	三	キ	白	三	キ	白	三	キ	白	三	キ	白	
後の鳴来る水のかさりめ	ちろとまらさきそん音勢	手ちえのよんちれの出勢	春ののんをうけて忍れ	水さやうようの索 麵	肩衣を忍之る松の枝	月をも乃めそ井戸の権	小さん室さきる祀子	かーおんお多勢ていある	祇衣忍て冬を清く武田隊	小袖忍ぬえうの猫の育れ	呼をさきく花のうらや	季中あれもなごうあく	屏獨さきさうてこれも寺	松の早うばんで口をさ	大おひよ忍ぬえさうて	度許のさう役も頂すの浦			
白阿	林角	松友	高石	キ風	隊團	山り	支房	北而	早北	巴飲	懐付	考	井炊	珍	猿雀				

カイ印五

枯	才子よとて物人の子よ美す	高白
と	むこそまじあき旅乃良	イ能
山	大枝のちまよまふとあ	ソ由
下	言敷の博とて月かきと	
、	山陰の月まきんを陸木杖	急弓
、	原の意とて横柄ふ文	林弓
み	る乃とて日いさるゆやう	若芝
や	やうとてあ人のあとの冷やう	舊能
梅	路次の戸いぬておかうささか	呂杯
さ	飲さうさあやとむおてやう	甚二
、	おまよ又降さうかりき	了夜
、	ひんう。お珠やの店の降さうか	栗ル
ハ	あけを便乃疾うし	何笠
、	るたの亮のをとあ	、
、	献立は戻の便とわ	整隊
、	美人の物も計ま	能え
、	むりまういされて君は後向	ホ乃

分	翁こと内よをうい	凍ト
、	女子をううお忍あ	許云
、	と人の世をううたて	ヤハ
、	洋をううり	昨古
、	はるの十粒をうう	二
、	附木をううとめ	立ホ
、	初をうう	、
、	名月のさし	お梢
、	尾まきあ	若如
、	草をううとて	天宮
、	坊のあ	味飽
、	尾まき	仲志
、	代不	七る
、	産の連	た林
、	あ	島段
、	親	七り
、	肩衣	支考

ヤハ け子こそ喜ぶ唐うむほあれ 我思
 夕 口くせよ丁そうくさる砂
 末 ちつとまふをそんむる影 白鹿
 シ、 影よまきくむもむあう
 残 高もきく余きよの宇走きて 只仙
 白夕 高のまぶよあう寸草の月 柳士
 何 月もまよとていそぬ言の内 伊能
 何 倭をさてもまよの面 小枝
 何 何をさんても病ふに月 匡吉
 何 先方の状は何と粟稗 小枝
 何 何やうもんおと為ゆく 士
 何 ちくちく何の指さちくそ
 何 ちあう何とわくひよな 采麻
 何 上の方のお梅は何と田の我 ま符
 何 振くるきくお扱て何きるそ 泊月
 何 何やうの夜は小箱二三匹 雪琴
 何 又又扱う空の耳干 琴凡

ソ 其血志くく一命の芝 千角
 多 晩のりそりと新せ其葉 街
 三日 孫をくくくく付其うち 菱花
 コレ 是後よきれん月もさうらう 因民
 中 使とらり連うてやまをさて 涼ト
 中 植後くく田の中の小田 吟山
 中 打ねてくくの中戸の四丁 ソラ
 中 没广の中ちちんと等とお終て 三惟
 中 空で拵あうくく藪の中
 中 町中いゝん社の杉檜 秋房
 中 暖拵ふむの中より 八雲
 中 中を叩く室の 轉合 及我
 中 我我の中よき傷も月のあ 赤那
 中 比くれて笑ふ大工の下まきか 赤那
 中 大とて是て一日の換 一
 中 大屋の影はうも海辺 巴今
 中 大さか雲のひくくくと 呂仙

カイ印五

●印十

名 篋 栴の白乃 今よまろくし くり
 今 あくまの今よ栴ぬ隠迹 甚二
 先の手紙を今念息して 涼卜
 人の吳又よ今念息つく 字中
 今栴てまじよ栴き削売 有り
 今そ情も實忘うま 嵐宮
 今記さ空まをくま氷汗 伯急
 そら今今く何あく出代る 欠書
 桶よまきく 居る赤版 左把
 一度あるる 二万もある之 以之
 升のんるふを茶の裏 少枝
 よんるよ一縁の爲んを可矣る 支考
 深人のまの何てあるるそ 甚時
 使 使のまきまのまきまの 汎舟
 お餅り水き一医志の足るま 西を
 栴今 又ちろくくと栴のまく 湖水

又 又一志きり備の 何き 控函
 十 又まられて又出寸 吸お 宗波
 界 今のるよまの厚まきま 口八
 丸 念月のるよ今まき草 柳 弱
 丸 米俵力能ある斤子 口通
 丸 湖の端支能の杖乃 口通
 丸 保せのまのい何不能ふ 有り
 丸 一さくく能栴口 又行り 嵐舟
 丸 才乃の栴を隔あちよ九お 不有
 丸 終報もままてたぬ方のは 岷音
 丸 草あ人よ引舟の付寸 佔西
 丸 丹店よた乃のおまよ 佔西
 丸 多の白きお髪の傍の衣 衣
 丸 具の壳まよる月のみ 衣
 丸 寸人まよと苗代めまむの 衣
 丸 之要くやまよる空も化 衣
 丸 弱 口カ

カイ印五

ア	方	白	十	夕	不	炭	属	皮	時	雜	後
言	方	戸	十	夕	不	炭	属	皮	時	雜	後
言	方	戸	十	夕	不	炭	属	皮	時	雜	後
言	方	戸	十	夕	不	炭	属	皮	時	雜	後
言	方	戸	十	夕	不	炭	属	皮	時	雜	後
言	方	戸	十	夕	不	炭	属	皮	時	雜	後
言	方	戸	十	夕	不	炭	属	皮	時	雜	後
言	方	戸	十	夕	不	炭	属	皮	時	雜	後
言	方	戸	十	夕	不	炭	属	皮	時	雜	後
言	方	戸	十	夕	不	炭	属	皮	時	雜	後

次	中	三	冬	枯	印	声
次	中	三	冬	枯	印	声
次	中	三	冬	枯	印	声
次	中	三	冬	枯	印	声
次	中	三	冬	枯	印	声
次	中	三	冬	枯	印	声
次	中	三	冬	枯	印	声
次	中	三	冬	枯	印	声
次	中	三	冬	枯	印	声
次	中	三	冬	枯	印	声

カイ印五
三

船は下りて居るとつて 粟ル
 溪の底よりいふ等目 白蛇
 七き 恨を抑も此存のちり 涼ト
 、 子供達をうけつゝいふも 骨小
 かも おおろろいゆる眉の糸尾 ソ後
 おおろろいゆる眉の糸尾 路矢
 おおろろいゆる眉の糸尾 路矢
 白蛇のお母をたぐ水郷に 三泉
 神ももお忍あされて荒杜也 梅不
 山王 お前の御代をたぐもさうそ 小枝
 、 お前の御代をたぐもさうそ 巴弓
 三匹 おおろろいゆる何さういふ月 葉小
 、 河と馬子と先く お使 支考
 炭 おおろろいゆる何さういふ月 葉小
 ひくと云出すお命の事 葉
 俳諧 此は成田同字いふあむと尋ねる日
 とも難する人あふ不能候こといひあむいふ
 ▲お前の向い古云面まあるる病の事い古云りて

難する人は花つとていふと去強の寛
 ありあそはむも言置あれあらしおけと御之
 □五去用云 カコエ五
 海に上り下りいふ余引孫連出
 母集包約捨拂指拵扣折髪
 返りしゆ戻房取裁之新袴い髪長
 ば中三去と受れと何おきれい言守おあ
 市尾 為雪の一過度い海口り 考
 界 川一ワはつてさきおあよ 氣
 及 走松はるる 妻乃去風 風玉
 、 やかの床下之はる街川
 甚 志ぬ川人のはるを眺めて 捨京
 、 走上て はるる反さく 路歩
 天向 採舟の矢橋をはるる言分お 小渠
 、 うきようをきこももはるるう 路歩
 市向 何為の隠さくお一掃はる 紗柳
 七ツい集てはる通 札 宇麻

天回 雲層控む松の 根より 若呂
 岩衣は夜も思ぬ風流の上坊 百川
 志のあつちん隠さう思より 彦支
 燭香も後うよね引いて 智仙
 師上し月とむとあおぼゆる 冥芝
 新梅を牡丹の枝より表より イ吹
 面影をおよ南より上トー キ角
 雪を採とあくる氏とあー 次我
 白雪を口けてあつめ山鳥 自笑
 杖や昔より分るる字と名 糸弓
 匠分のむ修政の面長う 林呂
 深分て裾に牡丹のむう候 八葉
 信くも俵を去る守令え 子サ
 ん分てとらん晴るるの月 翁
 娘も甘えうりて情と明 翁
 晴るる候の葉沙も明弘ワ イ翁
 阿番のあやと明の俵付 酒を

志瑞 長生の田の荒仕る際めそ
 月又よと引起されて胸き ソラ
 是引のあつちん捨養 口入
 園より引出守衣の香と刻て 杏雨
 板妻引たし才子大ユ
 よあつちんあつちん引たてゆく 老龍
 元を函てう内多引込 存彦
 焚きさしを店合の格と引抜て 秋丈
 水多のあつちんあつちん川の上 巴丈
 酔て又わなはちのの上 翁
 持さるる連をききて持合え 次人
 持たるるも持たるる小志助や 尤白
 情い孫持とと抱あつちん 右音
 娘子のひきま箱もわさうら 文字
 弟皇子のりらわあも盛ね母 里明
 志よ盛ねのそととあつちん 東お
 阿のあつちんあつちんあつちん 理敏

小弓	葉川	あ	六行	者	子	り	の	女	種	幸	花	
か笑うの波陽約む木下及	わづこまてしつてたひ約む	あの中い他候色むそ	集てそまきお乃実あ	所洋室も只子供母	あ一人い山をまよお母	ゆめおむる人の家なきお母	よらまきまあぬ老の身	夕月を初し車く杖の風	大文字上鳴きまゝ古候	にましはれまゝの春候と	瘦骨まき記あるカ多き	独変りー 比きの板を
如俵	支考	若人	仙呂	り	伝り	涼ト	言不	三葉	近仙	空持	史那	去来

次句	持	を	葉	小弓	一橋	手	ね	ツモ	ムウ	橋					
洗拂面やうまきつるむ	古長余の持子捨まきして	持れてくまうをの救き	花の枝梅の心しを捨よりり	持えはあうくく傍仏く	蚕まてうろく岸の持衣	勝さ丹よりす持幣の魂	合持てと合とあむむの色	空智持て 眠る所を	葉のつじを捨る松の井	金ね名月まの正れ寸	新の燦をねふ 麻粒	又足せまのねを云正し	ちり吹おふ他のま柳	禿敷を眉入りてつむ	旋葉陸より恙草をつむ
奈智	若	羽豆	若	笠凸	百花	弁三	赤彦	信風	桐和	涼原	濁子	云致	、	み我	キ角

カイ印五

五

三良	妾	依	次	小	百	枯	お	り
一町のむすいれお借れたあ	酒を おま ^い サ ^て う ^の 下 ^に 居 ^る	秋風や着坊持の信ありぬ 去旅おあくるる物(げ) あふもわつさる 秋 ^を る	又かくやう佐声うする かまを ^い ま ^け て ^困 る ^証 お	又かくやう佐声うする りろは口たき止 ^す そ	束 ^す くお ^き 戸を ^ぬ けて ^あ る	秋風や着坊持の信ありぬ 去旅おあくるる物(げ)	お 二木の代を持来ぬ所の相	お 神 ^の 世 ^を 持 ^て 上 ^る
新川		方丸 揚氷	史邦	天宮	た相	言 ^に	巨由	金堅

疾	麦	柀	芭	柀	位	カ	深	菜	老
小傍へ把てあつやふ入	白 ^ん お ^み や ^り お ^み や ^り	あ ^の あ ^の あ ^の	あ ^の あ ^の あ ^の	あ ^の あ ^の あ ^の	あ ^の あ ^の あ ^の	あ ^の あ ^の あ ^の	あ ^の あ ^の あ ^の	あ ^の あ ^の あ ^の	あ ^の あ ^の あ ^の
二	窓	也	至	元	之	乃	松	葉	竹

笠	市の房乃あまほむや	麻三
疾	溝沢の房を風ろく霧より	若下
山	あつうたれぬ月の子	六之
一	今ん後うたれぬ	実長
一	傳うたれぬ	水也
一	志とくし流杏房の宮	初柳
ヤ	坊をを居ては比乃去	末右
一	松根の今奪ふ居居て	伝徳
一	記れぬねむる森の裡まひ	葉老
取	乙多う被取てそ	唐え
キ	初花のささあきまをて	杉風
一	権成はたををのそく花町	袋水
一	各にのねをむすう新あけ	号那
一	各に云士乃をてもる病	若
イ	雪又うたれぬ朝の足	乙由
一	町角うたれぬ川	お新
一	末枯の夕木	乙由の孫
一	如り	

一	灯大孫の房の庚申	支考
一	賣孫しるる屋の湯木	自笑
一	恨を笛は吹孫しるる	あ辰
一	痛はつれてるき世去也	口通
一	うささうせ井は清る傳	正秀
一	月まの許をうき采の敷	彼屋
一	名にきえ道を飾るて	
一	せん癖のせん菜はあく	り和
一	伝伝も拘てまひも去也	事平
一	以中言居伴も交れと一不は入り	
一	□五去辞伴云カヨ五	
一	家作あつ故只上は下は捨	世
一	形古に伝度真社名懸	斤叩
一	白戸	まをりある
一	おに戸は初獲か	けり
一	あ	候又やと打突つ
一	行よ身を夜つ去の風	舟泉

カイ印五

〇七

三匹	葉	上	佐	三匹	只	七き	十	百	カ	リ
三匹	葉	上	佐	三匹	只	七き	十	百	カ	リ
三匹	葉	上	佐	三匹	只	七き	十	百	カ	リ

カ	サ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
カ	サ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
カ	サ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ

世	衣も捨て遊きよの中	柳里
世	食もあつて厚世のお借	麴粒
世	門々先くちる	お徳
世	夏布をまめる秋町の市	有厚
世	秋の産さくも古きれ	嵐号
世	古き衣の柏	百り
世	あつた友を懐き旅返	川水
世	亡人と古き懐紙を弄れ	一栄
世	家の隣くは泣き声	り牛
世	家の傍吹たりたる掛目	コ屋
世	庭のおちの泣き声	占ホ
世	びと実の母の泣吊て	三芝
世	山陰の古くも家の又ツ	蒲衣
世	口あつてうつついとむの屋	老年
世	松葉ふしの寺店の陰し	占松
世	陣はゆきゆく	老谷
世	月影も梅も二度の旅返	老え

及	石波糸の連るこち	山桂
及	木い木危町の奥よ三弦	土相
及	板敷の奥より奥よ家た	、
及	奥の世をい	をの作
及	大工もの 奥よ中	、
及	ちやつもの 及の程	方
及	まきりもさり	山
及	庭のよき	三仕
及	程つさけて家中の葉を	、
及	柱柱て小枝よむの心を	更也
及	うき中のるそよ奥の名を	翁
及	以内そ今中よと名を	依
及	くく負する名ふり具	友五
及	やまのま灰あるむ	仙化
及	秋葉も来たるむ	千り
及	梅そ影の群る方い	占
及	土壘の影も出るむ	占不

カイ印五

九

舟舟子 舟舟盤を斤手よ来の下して 箱
 斤 斤乃いなきは強きふきけ
 反 反はさくろく斤類の月 舟七
 斤 斤はきのみ洞きいて悪草 之乃
 信 信くは切の積の二行 多像
 加 加去めけとも既巴の似會 之林

□西去用云 カキレ

東道位笑眼是極州服是記居は十本は態
 字の凡何より西去用云七八もあつ
 唐字の多用あれ云云入るは西去用云凡
 才去已上更中多用のわい云云云云
 去を遣追也去遠通遠掃掃掃
 投投投投投投投投投投投投投投
 洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗
 惡惜傷恨忍忍強強強強強強強強強強
 終積強強強強強強強強強強強強強強
 列初初初初初初初初初初初初初初

呼吐突翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁
 飛語誘誘誘誘誘誘誘誘誘誘誘誘誘誘
 盛盜亂上上上上上上上上上上上上上上
 破起復復復復復復復復復復復復復復
 出来仕也協り出り嗅

やへ 幸山も雲の傍に梅来て 又石
 九 眼目もまき一石の投舟 云水
 九 才痛きく入おとつく 不
 九 剛はまきくよりのむの言 沾不
 九 地乃まきくよりのむの言 急否
 九 雜も内裡もなき山里 着下
 九 入おりさくすの中も 是をい
 九 手ん吉世や物尾のむ 三惟
 九 百うまんと門の許あ 天意
 九 是あきく一何房抱る 甚二
 九 所まきくも 旅のき由 せ極
 九 言ん言路のむきそく 質白

三良	相市の金屋末もきまれ	物
き	向もお合まきふ予人植	曲
年分	位云天服通の人位ひ	一
、	き余の資跡よ不伝の浮ん	習
勻	物撮匠出守机のきき	り
巨	破のきあひし麻をわつ	許
小文	八郭の背刺よ回るとむ	窟
口	本をさちくどれい及身そ	山
皮	志とよあひてらきお二重	水
多	多さぬ悪う母をお文	占
深搦	あふおのん 仲をさく	伝
、	久しうてきて何々をやら	ソ
笠	多傳う向のまふ佛伝	連
連	跳ひやうと手紙の入遠	、
底	り連ひま撮て通るねのり	曲
車	老やうくとむんの車さ盛	正
張光	通のあきよ店ちる 杖	秀
		支
		考

ムリ	足て通る紀三井むの候意	翁
、	お通る人呼する務の意	若
一かを	七りう大宮通権のき	字
車	天意くくく通路の面	似
名遣	中引くくく軍方り通路	、
お	小叔忌きう店月足の毎	甚
、	厚かききお一日春ホ	二
、	旅人もるよ持て候の喫	右
、	農休とて 里の持日	範
、	のせまう年お持志とて	、
、	お人のおまうおまきあれや	風
、	おふき言の警さたき	神
、	子んよち急のけり難	那
、	おふんのあうこを	千
、	玉子のうりのきき掃	梅
、	す掃のた突で急の取	り
、	立上てらたあをく	年
、		ヤ
、		ハ

カイ印五

五二

眠	了	拾	位	公	年	夜	殊	興	深	次	句
秋。乃。異。の。き。あ。う。ひ。て。あ。る。		一。眠。し。て。椽。の。ひ。く。		眠。さ。さ。の。ま。あ。る。け。る。		上。上。は。眠。の。さ。の。あ。つ。く。		長。き。お。と。は。る。ま。の。ま。を。か。へ。		は。く。て。志。や。い。の。田。果。も。せ。	
源	十	角	斗	大	龍	太	龍	和	九	如	方
十	斗	角	斗	大	龍	太	龍	和	九	如	方
十	斗	角	斗	大	龍	太	龍	和	九	如	方

足	次	句	句	句	句	句	句	句	句	句	句	句	句	句
あ。ふ。と。ん。あ。わ。の。あ。い。受。う。	こ。の。は。林。ま。ま。あ。えて	あ。の。は。だ。て。あ。の。橋。あ。げ。保。保。る。	お。の。原。さ。く。あ。の。さ。る。は。い。	お。の。地。の。市。日。足。あ。つ。く。	あ。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。	あ。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。	あ。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。	あ。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。	あ。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。	あ。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。	あ。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。	あ。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。	あ。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。	あ。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
竹	丸	角	斗	大	龍	太	龍	和	九	如	方	史	邦	史
竹	丸	角	斗	大	龍	太	龍	和	九	如	方	史	邦	史
竹	丸	角	斗	大	龍	太	龍	和	九	如	方	史	邦	史

高	志	雅	赤	西	美	続	思	あ	借	望	情	三	皮			
年みれうしてそきさし	きくむま盛版付を志りり	志寸よれ侍る弓の心	志むとあふ久大の熱きよ	月を志ぬる山のそ	そんあふりきて侍る志草	多の志よむの枝青	若る山の志乃むる鶴	悲すくりもつらある志	つらふりして侍る子供志	我志を吹れり守口をき	十日の志のそきさるそ	り交ふ親母きむの志情き	今もあ便すおき侍る	あうらふり志の上まき侍	何きつらも侍る船取	恨て肩へくる十志人
安伝	志衣	志衣	志衣	宇申	志衣	志衣	志衣	志衣	志衣	志衣	志衣	志衣	志衣	志衣	志衣	志衣

眼	次	恐	孫	尋	望	煙	胎	你	欣	多	葉	花	定	者	三	
月を多しと打恨	巾被下て扱の志踏の志言	金箱の人の志てあるこ	おそいの侍を尋る侍りつ	文よひひり草を尋るまや	月おを嬌ふ人もおろり	自れと嬌ふあまの喚	夜性のまきと胎ぬ大侍	程度りもちと志を位胎	正気若のむ風の物さよ	身合の志上戸まて欣明	文のお花の志を葉する	葉をすりつと抱まらする	夕空のぬおの志の白	あま上りの連も定る侍	志をすりつと抱まらする	門よせて志草の献志
涼ト	方丸	キ角	扇書	扇書	扇書	扇書	扇書	扇書	扇書	扇書	扇書	扇書	扇書	扇書	扇書	扇書

カイ印五
五

白狐 尾のひれも種跡さぬ青喰 万葉
 子苗もつんと種跡さぬ 鹿
 お誘く日あはるを待合 鹿
 僧誘く案後舟乃五之艘 鹿
 皇栞よき月の細乃一節よ 鹿
 陽をさぬる雲の細乃 鹿
 おせんの細乃の白あき 鹿
 英時を誘く船の月神 鹿
 皮の尾の細乃の白あき 鹿
 今結く髪を誘く口や志 鹿
 結をて細乃の白あき 鹿
 髪を結く髪を誘く口や志 鹿
 素風よ衣法結く机の中 鹿
 栞結く髪を誘く口や志 鹿
 万葉も只一人の刻の果 鹿
 刻の純子のお志よ森をこれ 鹿
 白狐 刻の純子のお志よ森をこれ 鹿

白狐 尾のひれも種跡さぬ青喰 万葉
 子苗もつんと種跡さぬ 鹿
 お誘く日あはるを待合 鹿
 僧誘く案後舟乃五之艘 鹿
 皇栞よき月の細乃一節よ 鹿
 陽をさぬる雲の細乃 鹿
 おせんの細乃の白あき 鹿
 英時を誘く船の月神 鹿
 皮の尾の細乃の白あき 鹿
 今結く髪を誘く口や志 鹿
 結をて細乃の白あき 鹿
 髪を結く髪を誘く口や志 鹿
 素風よ衣法結く机の中 鹿
 栞結く髪を誘く口や志 鹿
 万葉も只一人の刻の果 鹿
 刻の純子のお志よ森をこれ 鹿
 白狐 刻の純子のお志よ森をこれ 鹿

カイ印五

五五

五衣 新く身とむむ人之笑ふ 南木
 笑 珍し笑て外の上杉尻 赤毛
 笑 幸しと伝て笑ふ田 彦平
 笑 笑仲方の山も三崎 りお
 笑 笑ふん竹も笑ふぬんう 伯老
 拾 何れそりつらまや笑ふて 甚二
 拾 服子せきき田舎之りり 菊
 笑 笑つて煮くらふ人の喫さま 力分
 笑 備念のお家あくと名を呼て りお
 笑 うれと旦那と妹うまうも 一
 笑 笑ふもそりくおろう後て 賢白
 笑 笑ふもそりて笑ふ古朋事 登原
 笑 笑ふん中も笑ふの山は出あり 連支
 笑 笑つて之とわ高の虫也 胤山
 笑 笑と吐あんとくくまき 杏る
 笑 笑ふもそりて小志の吐合 ヤハ
 笑 笑の書乃書戸と笑伝 菊

笑 腹巻袂扱や吐息つらむ 似去
 笑 新巻よむき成り修の香 持りし
 笑 笑のうとく許すまきしお 一
 笑 手と向ひて今夜新しぬ け漏
 笑 月さく夜中あつて新く 文香
 笑 千石と登れへ人も人りき 卯七
 笑 梅の月と登れと香の雪 采麻
 笑 斗部をよ枝の音と竹の風 三好
 笑 休日も痛き心の表よりく 口通
 笑 君と代へ解のむのをあきて 二
 笑 ねんかおきれい風しく 平
 拾 約守の二言もあつて髪 安伝
 拾 芳加し 今の竹垣 牛安
 笑 笑のの泣ととる草の戸 芳香
 笑 笑の田植とあつて 多枝
 笑 笑とハガシと伝笑あれとも同伝の泣白
 笑 笑のめあつて笑つていんんん

葛	あつくと地味作が一人	左友
作	言る鹿の原は細作て	相摩
穴メ	花の香る古き部の町作	ソフ
山	花の香る古き部の町作	小枝
椿	花の香る古き部の町作	呂仙
借	花の香る古き部の町作	吉次
松白	花の香る古き部の町作	史邦
之園	花の香る古き部の町作	杉尾
壬	花の香る古き部の町作	箱
他	花の香る古き部の町作	一花
凡書	花の香る古き部の町作	根市
拾	花の香る古き部の町作	去芳
	花の香る古き部の町作	ラ

次句	手ん抱は良書あて	花	高英
活	芳は末て新と借の時	キ角	
言	先程と云くおのおの	活	揚水
世	先程と云くおのおの	活	曲家
了	先程と云くおのおの	活	不有
あ	先程と云くおのおの	活	舟泉
十	先程と云くおのおの	活	力分
後	先程と云くおのおの	活	里風
箱	先程と云くおのおの	活	貴仙
さ	先程と云くおのおの	活	文桂
箱	先程と云くおのおの	活	一字
美	先程と云くおのおの	活	乙女
	先程と云くおのおの	活	正妻

カイ印五

五七

月むも夢さねる妻もて 夢平
空扱てねれよよの 春後美 りね
さきさき喰れて仕立の豆蔵店 一字
はあつらふらうの候もあー 依角
何夢も出て揚るの候もあー 冒川
月ま舟の舟費おすり 舟費
あつらふて うるやんき 舟費
ぬ月や酒を夢に扱ててあて 冬文
買うく茶入もありの控出 匠考
苗代の假借。ふ人費 監在
あつらふてふたふ山巾 こそム
本家の子苗世ふる姓 子
控てあつらふてあつらふて 酒考
はあつらふてあつらふてあつらふて 酒考
左横二並て下戸もどの陰 栗ル
小瓶の例もあつらふてあつらふて 酒考
依角もあつらふてあつらふてあつらふて 酒考
占ホ

けの寅よいさ 茹の出盛て
日盛よ鶏うの 声と愛人 酒考
む盛よ心室の 乃の人通い 相笑
あつらふてあつらふてあつらふて 乙由
あつらふてあつらふてあつらふて 支考
あつらふてあつらふてあつらふて 酒考
あつらふてあつらふてあつらふて 石周
あつらふてあつらふてあつらふて 口控
あつらふてあつらふてあつらふて 燕毛
あつらふてあつらふてあつらふて 只白
あつらふてあつらふてあつらふて 枕呂
あつらふてあつらふてあつらふて 楓里
あつらふてあつらふてあつらふて 聖考
あつらふてあつらふてあつらふて 丈州
あつらふてあつらふてあつらふて 枕妹
あつらふてあつらふてあつらふて 小枝

カイ印五
六

菅を刈上げて門を弘く
 河なり川の尻を廣く
 六月の始摘る玉ありて
 月并の好摘る草州
 村をまゐりて小萩一軒
 藪をまゐりて人を難
 乃をまゐりて世を
 布子もて布子もて
 川向ふれ使もてぬ
 いせ備の果いりて後
 川のみありて田を
 極をててちち極を
 井の領極るちち極を
 ちち極を極育おく
 哀もも極の葉よま
 枯ゆく病よまま
 松草よまら極の枯
 ソム
 水胡
 侃如
 富
 ソレン
 伊良
 桑柘
 菊
 牛角
 揚水

ヤハ
 浮世のむと合の草
 秀に区勢を流るる
 笠あて夜の竹つり
 竹くも尺をよま
 むく。起りてま
 きりむん登。庭を
 まけて起て山を
 起てて起るる分
 引起すおのるや
 とちち舟よま
 具足の子起す
 丹席の合て起す
 女月と小袖の
 博小の和書ちち
 松の屋くちち
 庭極高根よ
 才凡
 初始
 崖水
 相葉
 在者
 四年
 ヤハ
 源ト
 万子
 文章
 乃九
 骨小
 翁
 吟山
 似去
 ト尺

カイ印五

五九

者 疎よりそれてちまの舟なり 子む
 有り せをさくさく誘ふ舟に 菴舟
 は 妻ありく九条あふの草の声 支考
 栞実ありく今この他社 菴舟
 室は倚きおのてお字を執とせよ御言の勅字
 面去、おれんてくソグの倚あくと同去と知
 系字仍おれ強音も同じとら乃は但お
 似る初まとも我い年をあらう句より二ッ
 糸はたおれ面去も可あむとくあせよ

□面去辞体云

・下八まじ上

つらつらさうさういといまま心行必
 皆は^計あまどそちよまおれ初おあ後
 横まへり西東化僻俄仮以役役
 番際及れ献^切香^切賃^切教^切昔^切房^切笛^切と
 世中後世自由美理^切機^切嫌^切事^切と
 あい^切云おさの月又やあうらう 凡人

カウ 後ふるりる令二万両
 七き さらん底^切物^切よせきあけ 朴人
 サリ さらん^切終^切日^切く^切香^切の^切月^切 之伸
 若白 きらね^切は^切裕^切の^切比^切あ^切れ^切 所言
 山中 さらん^切む^切え^切年^切の^切は^切は^切 乃九
 さそ さらん^切の^切畑^切よ^切さ^切も^切草^切の^切む^切 心口
 白ク さらん^切さ^切て^切よ^切ん^切お^切さ^切ら^切い^切葉^切露^切 自笑
 白 さらん^切こ^切も^切あ^切う^切さ^切ま^切さ^切て^切栞^切花^切 匠者
 白 さらん^切い^切さ^切て^切俄^切き^切さ^切の^切林^切の^切は^切れ 支考
 白 さらん^切ぬ^切も^切ひ^切く^切あ^切ら^切さ 茶室
 白 さらん^切隣^切の^切む^切い^切り^切も 十八 林石
 白 さらん^切地^切よ^切あ^切ら^切の^切う^切ら^切も^切八^切石 竹信
 白 さらん^切珍^切ん^切ん^切者^切も^切ら^切も^切そ^切て^切あ^切き^切れ 喜作
 拾 今のはらま我はまらう 一松
 白 さらん^切む^切の^切さ^切ま^切亭^切ぬ^切鳥^切の^切我^切懸^切ら 三羽
 白 さらん^切白^切戸^切栞^切ん^切通^切ま^切む^切我^切時^切る 偏子
 白 さらん^切珍^切の^切星^切の^切我^切う^切ら^切む^切こ^切も^切透^切て 三羽

葦

五

何のじ候のいよまきしき
いよまき候は吹矢と夜より
相葉

白鳥

八

七ノ五ノオモイハ
オヤノオモイハ
祇堂は
水

、

オヤノ喰てある二日月の群
オヤノ下往て来るオモイハ
天宮

、

と名之ともオモイハ
オモイハ
糸

、

先老傳の四月より
オモイハ
松友

、

先いひこのよまき
オモイハ
涼ト

、

先今月のオモイハ
オモイハ
支那

、

先十人のオモイハ
オモイハ
一同

、

時をあら山崎に於
オモイハ
益村

、

先人のオモイハ
オモイハ
柳江

、

先人のオモイハ
オモイハ
林角

、

先人のオモイハ
オモイハ
葦二

、

先人のオモイハ
オモイハ
林角

、

先人のオモイハ
オモイハ
葦二

、

先人のオモイハ
オモイハ
林角

山ト 兀ていそれとさらの山と 理業
 三子 あらうく響つく町あらうく 巴弓
 三日 町くもあくる喜ん大陸海 除風
 コ、 小柴垣そくあくは 休 丹炊
 小弓 吉あく守中町いこの後 風玉
 三コ 百友やとそその後てき子出 赤磐
 フコ 休まひされいよその原指 日圓
 ヨリ 利されい衣を山よきこ入て 青水
 三日 あのだいよまよくきり 紫柳
 三日 三をいよまよくきり 日
 三日 黄まよあれとよその批巴く 和友
 三日 念仏を誘ふよその八お 香粉
 拾 秋まく哀と拾ふむの売 夕葉
 三日 若星も哀まよその熊理及 口通
 三日 六月ころとんそそ哀あれ 支考
 三日 頭博の哀い又ま定りて 仙雅
 炭 三日 初丁よきま下地おて入る 八

初 初午子母房の親子抱いて 三日
 三日 死をそ移し初の智冥 回牙
 三日 二人う二人いせを初旅 如朴
 三日 初日の世も初いあく 水
 三日 風通子求室の外い響ま 柳
 三日 外ま掃て智ぬ大を誇れ 嵐
 三日 おあの日れくす月のお 直支
 三日 休まよら向もさせぬまあ 和
 三日 折くせくろああはあ 卯七
 三日 三六の方の手代ああもあ 柳
 三日 若く上戸の歌多りあ 乙柳
 三日 初山の房い道有ああ 菴
 三日 手持も内まきめああ 智え
 三日 三日の初開もああ名ああ 三日
 三日 一時も今のうしあのおえ 三日
 三日 三ああの後のおさくして 彫業

カイ印五

一栞風 仄尺限多門、手木と横立て 伝孝
 横 後保、いりし横町の寄 菊
 一きく あつ、所を遠く来乃白浪
 末 相、のあふしきあふの来
 づも 月の秋をうさう哀く 如風
 十七 花の妻来一返、かまうり 素雪
 へりをくろりと降る丸葉 巴人
 十七 ちくくやおく、白くをり 丁山
 言分 西文の二社の、若きくく 水開
 西 谷、谷、谷、入、お 栞因
 栞 東、東、東、西、東、の、事 松碌
 来 南、東、の、月、
 若考 比、比、毎、う、あ、の、高 キ角
 又 十、か、く、古、き、卵、の、化、名 り年
 八、年 角、を、後、朝、もの、栞、栞 晋如
 名 神、向、く、南、元、の、口、を あ士
 唐、分 ち、あ、あ、上、貨、種、包、む、俄、事 左月

俄 俄、陸、志、の、佐、も、手、作 文先
 ひさ 月、待、て、候、の、内、裡、の、司、百 孫、石
 仮 仮、の、栞、仏、も、む、ふ、会、仏、
 比 采、の、戸、の、納、戸、知、く、比、栞、く、
 三、日 比、自、の、髪、洗、ふ、比、 尊子
 万、嘯 新、く、比、の、程、配、く、比、 除風
 水、仙 比、比、は、花、も、咲、く、と、云、来、る
 梅、十 比、比、は、比、乃、ち、も、冬、栞 風、守
 山、夕 献、ち、は、大、き、く、工、又、も、花、の、比 杏王
 拾、後 外、は、ち、き、ふ、比、の、若、栞 ヤハ
 梅、十 け、比、の、程、乃、化、る、比、 急白
 山、夕 け、比、の、程、乃、化、る、比、 梅、支
 拾、後 新、栞、を、す、れ、九、換、一、栞 六之
 後 ち、あ、い、は、は、は、を、栞、く、て、
 拾、後 陽、を、上、田、舎、役、志、の、若、の、事 我、以
 後 所、走、の、後、は、ち、ぬ、あ、形 去、来

カイ印止

六尺

艾澄 教多れて妻の危病日も永一 以柱
 バン 其菜の二三人は種をうくる 菜ホ
 今 ありまづの妻を二人を仕付れ 柿
 居あつれきしる妻神 柿
 万 万の弁立云る上甲十
 コハ 淋毒と云て予ぬきとれ 甫什
 小月九 小月九妻の申すむ言位及
 山夕 多うい言句も一寸際あり
 与 行存も珠那の店の隣きか 栗ル
 拾 今の万う何夜あくる 一拾
 万 豆鼓志うる定るの月
 名 八部の流れいそく仕とろ 木音
 名却 手は小さき叔未供きとて 菊
 コシ 川流をまゐるあやの献立 菱花
 ソコ 手拍次方子内ハ 三献 母風
 カ 賞ぬ香吳の手も梅色 巴青
 ちのまゝ及まぬ山を打眺 鬼士

小文 初一本を稿の古き信天 菊
 貨 タくれまんと貨を投込 岱氷
 保 新の卵の敷を産持 桐実
 教 多うかきする丸菜の敷 支梁
 仙 月いむりの親父友連 菊
 昔 昔昔今の希の心付 信孝
 哉 昔性せん 入おるあり 假方
 昔の性 古池はあく 淫之
 ヤウ 髪のアハハも其昔も 留菜
 只おまの例あれも世中浮世の面云く照又よ 子並
 白戸 移居又一は六小刀是は後 膳足
 及 何もうも笑てまた親父及
 孫形 方丈の寸守い跡及よとされて 茂林
 魚 万ふあ守と旦那の寸守を味う 乙子
 柿 志ふも隠居の寸守は氣を遣 茂阿
 五 五ねこ尾の寸守を教 危松

カイ印五
 六五

二衣 二万十日も経るふよの中 文河
 帯 下中よ仙の程は懐いし 松五
 山 ありて浮世をほろ元天忌 松五
 今^六の浮世は心いれさしめ 涼ト
 梅十 井戸の自由と人のうやむ あり
 息 隙を交ておの自由さ 呂杯
 三衣 後々浮世の美程のち糸 為翠
 キリ 子いん美りを母の氣配 赤珠
 梅十 代友の友もあれいふきさむを 甚二
 きま 母親のきさむを菓子で付て 仲志
 梅山 風流てりきおやうおの月 松守
 今^六 以木舟と舟とむ程のわりき 由弥
 けまの空の字に指合の大空と未だぬあおろ
 何いささるあう後そ程き古何とんえけ
 空を減する字程のあしむ空を其空とんて
 空を補のくう

梅印録五終

